

ショートドラマ脚本

タイトル「逃走バス」

【登場人物】

木戸 瞳きどひとみ：：大学2年生。友達がうまく作れず大学は最近休みがち。友達は2人いるが、どちらも高校の友達で、大学は違う。ふと思い立って一人旅に出る。

佐々木 瞳ささきひとみ：：木戸が夜行バスで隣同士になった老婆。物腰やわらかで、人と話すのが苦手な木戸も、佐々木と話すことには抵抗が薄かった。

若曾根 千加子わかそねちかこ：：木戸と同じ夜行バスに乗っていた女子高生。ギャル。誰に対してもため口で、いつも堂々としている。

永井 紗奈ながいさな：：木戸と同じ夜行バスに乗っていた女子高生。ギャル。千加子とは親友。

10月10日 AM6:00

ゆつくりと自転車を漕ぐ木戸。

木戸「寒い・・・」

誰もいない住宅街を走る自転車。

最寄り駅に着き、一時利用の場所に自転車を停める。

電車のアナウンスが流れ、電車に乗り込む木戸。

10月10日 AM6:20

駅構内はサラリーマンや学生で混み合っている。

自動販売機で水を買ひ、携帯の電源を付ける。

―画面『7:00発 松江行』―

バスターミナルへ移動する木戸。

再び画面を見る。

グループチャットの通知が来る。

「チャット画面『1限だるすぎ』『うちのクラス必修だもんねー』『課題とかなかったよね?』『あるよ笑』『終わってるやついるんだがww』」
木戸、携帯をオフにする。

木戸「はぁ……」

鳴りやまない通知音。

画面には「坂本クラス」の文字。

バスがターミナルに到着。

バス運転手「7時発松江行きです。7時発松江行きです。チケット準備して

並んでください」

電子チケットを見せ、バスに乗り込む。

木戸「空いてるな……」

指定の座席に座る。

ぼんやりと窓の外を眺める。

もう1度携帯を見ると、まだ通知は届いていた。

木戸「はぁ……」

ため息とともに背中を丸める。

回想／大学構内 坂本クラス

教室の1番後ろの席で携帯をさわっている木戸。

木戸以外は友人同士で談笑している。

坂本「はいお待たせ。授業始めます」

教室の喧騒が少し収まる。

坂本「前回伝えたとおり、今回からはグループワークやつてもらおうからね。

議題プリント配るから各自取りに来てー」

再び教室が騒がしくなる。

木戸、人が少なくなったタイミングで取りに行く。

ープリント「日本でキャッシュレス決済を普及させるには」

グループで話し合い再来週のプレゼンに備えること。なお、

グループのメンバーは3人以上、5人以下とする。ー

木戸「おなか痛い……」

プリントを握りしめる。

ものの数分グループに入れていないのは木戸だけに。

ひとつのグループの男と目が合う。

木戸、慌てて目をそらす。

男たち、仲間内で目くばせをして木戸のほうへ。

男「なあ、俺らのグループで一緒にやる？」

木戸「えっ、あ、えっと……」

男「ちようどあと1人入れられるし。どう？」

木戸「あ、じゃあ、はい、あの……」

男「じゃああつちでグループワークやる。パソコン持ってきてる？」

木戸「あ、はい……」

5人で固まってグループワーク。

話しているのは4人だけ。木戸はただその場にいるだけ。

同じ光景が2週続く。

男「以上で、プレゼンを終わります。ご清聴ありがとうございます」

みんなの前に立ちながら、木戸は誰とも目を合わせられない。

木戸「(おなか痛い)」

翌週、1番後ろに座って携帯をさわる木戸。

さらに翌週、同じ姿。

そのまた翌週、同じ姿。

ずっと同じ場所に木戸の姿。

坂本「おはようございませう。みんな夏休みは満喫できたかな？」

後期初回はみんなの夏休みの思い出を発表してもらおうかな」

騒がしい教室。

1番後ろの席に木戸の姿はない。

回想から戻る／バスの中

窓の外をぼうつと見つめる木戸。

木戸「(義務教育を終えた学生の不登校は、不登校と呼んでもいいのだろうか)」

隣の席を見る。隣は無人。

木戸「(よかった、俺1人で)」

リクライニングを倒そうとする。

同じタイミングでバタバタとバスに駆け込んでくる少女2人。

木戸の真後ろの席に座る。

紗奈「やばっ、朝からしんどすぎ」

千加子「アンタがサービスエリアでタラタラ食ってっからだろ」

紗奈「あんたも人のこと言えないでしょ」

木戸、倒しかけたリクライニングを戻す。

千加子「全然倒していいよ」

後ろから千加子の声。

木戸、振り向く。

木戸「あ、じゃあ、すいません」

木戸、リクライニングを倒す。

なんとなく落ち着かず、またもとに戻す。

そのまま目を閉じる木戸。

バス運転手「7時発松江行き、まもなく発車します」

扉が閉まる寸前、老婆が駆け込み乗車。

木戸、驚いて目を開ける。

佐々木「はい、そうです、はい、チケット、はい、すみません……」

バスの入り口で老婆が運転手と話している。

老婆が木戸の隣に座る。

佐々木「ごめんなさいね」

木戸、無言で一礼。

バスが走り出す。

佐々木「本当、この歳になって寝坊だなんて、恥ずかしいわ。

アラームもたくさんかけていたのに、どうしてかしら。

バタバタしちゃったから、忘れ物してたらどうでしょう」

沈黙。

沈黙が続く。

木戸「……もしかして、俺に話しかけてます？」

老婆、木戸を見てにっこり笑う。

佐々木「あなたは どうして島根に？」

木戸「……ただの一人旅です」

通路側の少女が後ろから顔をのぞかせる。

千加子「以外く。超インドアそうなのに」

紗奈「チカ、知らない人に絡むの、本当やめてくんない？」

木戸、背中を丸める。

木戸「いいでしょ別に……」

木戸、持ってきたポーチからグミを取り出し食べる。

再び後ろから少女がのぞき込む。

千加子「それ酸っぱいやつ？」

木戸、首だけ振り返る。

木戸「違いますけど……」

千加子「なーんだ」

少女、引っ込む。

千加子「アタシ、酸っぱいグミ以外嫌い」

木戸、小声でつぶやく。

木戸「いいでしょ別に……」

佐々木「ここで会ったのも何かの縁だし、自己紹介でもしない？」

木戸「えっ」

少女2人が身を乗り出す。

千加子「さんせいーい！」

紗奈「チカ！　すぐそうやって誰にでも絡む！」

佐々木「あらあら、かわいいお嬢さんたちだわ」

千加子「アタシ、チカ。高2。好きなものはキラキラしたものと甘いもの！

シヤナとは親友で、島根には卒業旅行ってかんじ」

千加子、紗奈に続きを促す。

紗奈「はあ……初めまして、紗奈です。シヤナはあだ名。

同じく高校2年です。チカとは親友で、島根旅行は私の提案です」

佐々木「2人ともありがとう。私は佐々木といいます。今年で78歳よ。

島根には娘が住んでいてね、今日は娘の仕事の手伝いがてら、島根に

帰るところよ。まあ、私の家も島根にあるんだけどね」

紗奈「じゃあ、こっちには旅行で来てたんですか？」

佐々木「そうなの」

千加子「うちらと逆ってことだ」

佐々木「そうね」

3人の視線が木戸に集中する。

木戸「やつぱりやらなきやダメですよね……」

千加子・紗奈「当たり前じゃん」

佐々木が朗らかに笑う。

木戸「……木戸です……ええ……大学2年です」

沈黙。

千加子「えっ、終わり？」

木戸「……」

千加子「いやいやもつとあるでしょ！好きなものとか特技とか！」

木戸、小声でつぶやく。

木戸「君の友達だつて情報量は俺と一緒にだろ……」

紗奈「私はしゃべろうと思えばもつとしゃべれるし。」

あえて言わなかったのわかりませんか？」

木戸「しゃべれない人ほど、あえて、とか言うんだよ」

紗奈「あなたみたいなのがコミュ障と一緒にしないで」

佐々木「まあまあ。せつかくなんだし仲良くしましょう」

紗奈「無理かも」

木戸「……」

千加子「気にしないでいいよ佐々木さん。島根着く頃には

仲良くなってるから。賭けてもいい」

佐々木「じゃあ、私も賭けようかしら」

千加子「賭けちゃえ賭けちゃえ！」

紗奈「バカ、2人とも同じほうに賭けたら意味ないでしょ」

千加子「あ、ほんとだ」

佐々木「あら、ほんと」

3人が同時に笑う。

木戸、窓の外を見つめる。

佐々木「木戸くん、次のサービスエリア、ちよつと付き合ってくれない？」

木戸「……俺じゃなきゃだめですか……」

佐々木、につこり笑う。

佐々木「おねがい」

木戸、佐々木から目をそらす。

木戸「はい……」

佐々木「うふふ、ありがとう」

木戸、再び窓の外を眺める。

出発したときよりも、空が明るくなっている。

10月10日 AM9:00 サービスエリア

サービスエリアの様子。

千加子「空いてんね〜」

紗奈「平日だしね。あ、これかわいくない？」

紗奈、ご当地キャラクターを千加子に見せる。

千加子「ほんとだかわいい。ねえ、キドちゃん大学生でしょ？」

「買ってよ」

千加子が振り向く。

振り向いた先に、木戸と佐々木がいる。

木戸「なんで君たちも一緒にいるの……」

千加子「なんでって、寄るでしょフツー。ねえ？」

紗奈「もち」

木戸「あ、そう・・・」

3人が小競り合いをしている。

佐々木はにこやかに3人の会話を眺めている。

木戸「俺は佐々木さんと用事があるんだつてば」

千加子「え、なにそれ。アタシたちも行きたい！」

紗奈「絶対私たちのほうが役に立つと思います！」

木戸の両サイドで手を挙げる2人。

佐々木「ありがとう2人とも。じゃあ、お願いしようかしら」

木戸、立ち去ろうとする。

千加子が木戸の腕をつかむ。

木戸「え」

紗奈は不満そうな顔で木戸を見ている。

佐々木「もちろん、木戸くんも一緒にね」

4人でお土産コーナーを歩く。

紗奈「じゃあ、お孫さん向けのお土産を探せばいいってことですね」

千加子「まかせて！ 絶対いいの見つけるから！」

木戸「……………」

佐々木「ありがとうね、3人とも」

紗奈「あなたも何か言ったら？」

木戸「…お土産ならバスに乗る前に買ったほうがよかつたんじゃない？」

紗奈、信じられないものを見る目。

木戸「な、何か言えつていうから！」

紗奈「信じられない」

木戸と紗奈のあいだに沈黙が落ちる。

少し遠くから千加子の声。

千加子「シャナ、めっちゃいいのあった！」

紗奈「え、どれ？」

紗奈、木戸から離れる。

木戸と佐々木、2人になる。

木戸「すみません、あの、否定してるとか、そういうわけでは…」

佐々木「いいのよ、気にしないで」

木戸「…いつもこうなんです。何かしゃべらないとって思えば思うだけ、

人のことイライラさせちゃって。みんなが笑つてるときも、

俺だけ何が面白いのかわからなくて。しらけさせちゃうんですよね、いつも」

大学で浮いている自分を思い出す。

佐々木「やめなさいね、無理して笑うのは」

木戸「え……」

佐々木「無理して笑うくらいならね、泣いてるほうがいいの」

佐々木「おんなじ場所で笑える人と一緒にいればいいのよ。」

出会えるタイミングはわからないわ。明日かもしれないし、

10年後かもしれない。でもいつか絶対に出会うから。

それまでは流れるままに、自分が心地いいと思う場所で

たださまようの」

木戸「……でも、怖くないですか、それって。」

1人で暗闇にいるのと、同じじゃないですか」

佐々木「みんなでいるときのほうが暗いこともある。」

1人ときのほうがあたたかいこともある」

木戸「俺は、1人が怖いです」

佐々木「周りを見ないで。遠くを見る必要はないわ。」

でも、そうね……それでも寂しさが消えないときは、

知らない場所へ行くの。逃げればいいのよ。今しているようにね」

佐々木「今、つらくなければそれでいいんだから」

木戸「・・・そういうものなんですかね。俺には、よくわかりません。」

でも、初めて話しました。自分のこと」

佐々木「全く知らない人ほど、心のうちは話しやすいものよ」

木戸「たしかに、それはそうかもしれない」

木戸、初めて少し笑う。

佐々木、腕時計を見る。

佐々木「あら、もうこんな時間。木戸くん、あなたなら

何が欲しい？」

木戸「え？」

佐々木「孫がね、ちょうど木戸くんと同じくらいの歳なのよ」

木戸「いやでも、お孫さんと俺の趣味が同じかどうかは・・・」

佐々木「いいから、直感で選んでくれればいいわ」

木戸「え、えつと、じゃあ・・・」

ぐるっと周りを見渡し、1番近くにあったものを取る。

木戸が選んだのは、ご当地のお茶漬。

佐々木「木戸くん、お茶漬が好きなの？」

木戸「毎日の朝ごはんです」

木戸「・・・いや、いややっぱり違う気がします。絶対間違いました」
佐々木「いいじゃない、お茶漬け。私も久々に食べたくなっちゃった」

佐々木、買い物かごにお茶漬けを入れる。

そこに千加子と紗奈が戻ってくる。

千加子「佐々木さん、見てみて。桃太郎キーホルダー！」

紗奈「あと無難にきびだんご」

佐々木「まあかわいい。2人ともかごに入れる」

佐々木、2つともかごに入れる。

千加子「そっちはなに選んだの？」

紗奈「・・・お茶漬け？」

紗奈、木戸をあきれた目で見ると見る。

木戸「いいだろ、別に・・・」

紗奈「ないわぁ・・・」

千加子「木戸センスねえ」

木戸「お、お前にだけは言われたくない！　なんだよ、

桃太郎キーホルダーって！」

千加子「はぁ〜！？　かわいいだろうが！」

木戸「孫の年齢考えてから選べよ！」

千加子「ちよつとシヤナ、ひどくない？」

紗奈「……ごめん、私もそれはないと思つてた」

千加子「えっ」

佐々木「ふふ、3人とも、そろそろご飯にしましょう」

佐々木、3人が選んだものをすべて購入。

10月10日 AM9:30 サービスエリアフードコート

紗奈「私たちは卒業旅行なんです」

紗奈はうどん、千加子はラーメンを食べている。

木戸「え……高2つて言つてなかつたっけ」

佐々木「それに、卒業旅行にしては少し時期が早いわね」

木戸はサバ定食、佐々木はそばを食べている。

紗奈「うちの家、いろいろ厳しくて。今までは好きに遊んだりできたけど、

高3からは受験に専念するつて約束だったんだ」

千加子「初めて会つた時のシヤナ、2人にも見せたいわ。メガネで、前髪重くて、

猫背で、声ちつちやくてさあ」

紗奈「やめてよその話は！」

木戸「ああでも、分かるかも。初対面のときちよつと思っただ」

木戸、バスでの会話を思い出す。

木戸「生粋の陽キャじゃないんだろっようなあつて……」

紗奈、手を止めて木戸をにらむ。

木戸「いやっ、悪口じゃないよ、すごいなつて本当に思ってるから」

佐々木「じゃあ、自由な時間が作れるうちに卒業旅行を？」

千加子「そ。どうせなら学業成就？ しに行こうつてことで、島根」

木戸「へえ……」

千加子「こうやつて2人で遊べるのも、今年で終わりかもしれないしね」

千加子、誰とも目を合わせずに言う。

紗奈、動きが止まる。

紗奈「チカ、まだそんなこと言ってるの？」

紗奈、まっすぐ千加子を見つめる。

千加子は目を合わせない。

千加子「……」

紗奈「舐めないでよ。私は志望校にも合格するし、チカとだつて」

千加子「だってさあ、あんたの親父、アタシのこと嫌ってんじゃないよ。」

それでケンカばっかしちやつてさあ。ママだって悲しむでしょ、

娘と旦那が仲悪いとさ」

紗奈「それが何？ 自分のせいととかくだらないこと考えてるわけ？」

千加子「もう怒らないですよ。ほらほら麵伸びるぞ。佐々木さんも木戸も

ビビっちゃつてるから。雰囲気雰囲気！」

佐々木、心配そうな表情。

木戸、うつむいている。

千加子「いや、ごめんね2人とも。あ、アタシの麵も伸びかけじゃん」

木戸「あの、終わって大丈夫な感じなの……？」

千加子「あ、佐々木さん、あの桃太郎キーホルダーちゃんとつけてよ？」

せつかくかわいいの選んだんだから」

佐々木「ええ、もちろん……」

木戸「あの、」

千加子「ほらほらみんな、手止まつてるよ。あと30分が出なきゃなんだから」

紗奈、勢いよくテーブルに手を叩きつける。

紗奈「ふざけんな！」

千加子「……」

千加子は目を合わせない。

紗奈「ダサイこと言ってるんじゃないよ！ 私があこがれたチカはそんなこと言わない！ 私の1番の友達は、そんなやつじゃない！」

紗奈、食べかけのうどんを置いてトイレに行く。

千加子、うつむいたまま黙っている。

佐々木「・・・難しいわよね、友達って」

佐々木、柔らかく微笑んでいる。

佐々木「木戸くん、迎えに行つてあげて」

木戸「えっ、なんで」

千加子、顔を上げる。

千加子「行つてあげて、木戸。今はアンタが1番だと思う」

木戸「いや、それが意味わかんないし・・・あとさらっと呼び捨てだよな俺のこと」

佐々木「木戸くん」

佐々木、言い聞かせるように微笑む。

千加子「木戸」

頼るように木戸を見つめる。

木戸「なんで・・・」

場面転換／佐々木と千加子だけのフードコート

千加子「無理やり行かせちゃった」

苦笑いする千加子。

佐々木「大丈夫よ。木戸くんなら」

千加子「不思議だよ、アイツ。おどおどしてて弱そうなのに、なんでだろう。」

シヤナのこと頼めちゃう。男と2人きりなんて、普段ならさせないのに」

佐々木「人の感情に敏感なのよ、彼はきつと」

千加子「初めてだなあ……シヤナが怒鳴る声聞いたの」

佐々木「大事なね、紗奈ちゃんが」

千加子「……シヤナはね、初めての親友。アタシのこと嫌な目で見なかった初めての友達」

回想／千加子と紗奈の思い出

前髪が重たく、分厚いメガネをかけた紗奈が本を読んでいる。

周りは紗奈を嘲笑する。

同じクラスになった千加子が声をかける。

千加子はクラスメイトから奇異な目を向けられている。

どんどん仲良くなつていく2人。

紗奈の外見も千加子に近づいていく。

クラスメイトは遠のいていくが、2人は笑っている。

ある日、千加子は紗奈の成績が悪くなっていることを知る。

紗奈と家族の仲がだんだん悪くなつていく。

回想から戻る／フードコート

千加子「迷っちゃったんだよね。どうすればいいのか」

千加子の携帯の待ち受け。2人で撮った写真が写っている。

千加子「アタシはさあ、もともと家族仲も悪いし、失うものもないからいいんだけど。

シヤナはほんとは違うんだよ。ほんとは仲良しなのに」

携帯を握りしめる千加子。

佐々木「チカちゃんは、紗奈ちゃんと離れたい？」

千加子「そんなわけないじゃん！でも、アタシのせいで今シヤナは……」

佐々木「……チカちゃんは、紗奈ちゃんの居場所を守りたいのね」

千加子「家族と仲悪いとさ、いろいろ大変なの。シヤナにはわざわざそんな思い

してほしくない」

佐々木「そうね、チカちゃんの優しさはきつと紗奈ちゃんにも伝わってるわ」

千加子「……」

佐々木、朗らかに微笑む。

佐々木「でもね、紗奈ちゃんにとつての大事な居場所って、家庭だけかしら？」

千加子「え……」

佐々木「出会って間もない私が言うのも変かもしれないけれど、あなたたち2人は

一緒にいるといつだつて楽しそうで、すつごく輝いてる。親友と一緒になら、何でもできるつて気持ち。私にもわかるわ」

千加子「なんでもできる……」

佐々木「あなたも紗奈ちゃんの大事な居場所なんじゃない？ その逆もね」

千加子「！」

千加子、紗奈との思い出が次々と脳裏に浮かぶ。

佐々木「あなたが紗奈ちゃんの居場所を守ろうとしているのと同じくらい、

紗奈ちゃんもあなたの居場所を守りたいんだと思うわ」

千加子「……なんだ、アタシたち同じこと考えてたんだ」

佐々木「2人でいると輝いてるつて言ったけど、本当は、輝いている2人が一緒にいる

から、もつとキラキラして見えるのよ。ねえチカちゃん、受験に合格するまでが人生じゃない。私の歳になつたつて、人生は続いていくんだから」

千加子「・・・そうだね。おばあちゃんになっても、シヤナの居場所はアタシが守る」
千加子、ひとつ伸びをしていつもの笑顔に戻る。

佐々木「木戸くん、うまくやってるかしら」

千加子「佐々木さん言ってたじゃん、木戸くんなら大丈夫って」

千加子「それにね、あんなだけどシヤナって実は——」

同時刻、紗奈と木戸、トイレの前

木戸、何を話せばいいかわからずそわそわしている。

紗奈「せめてそつちからしやべりかけてくれない？」

木戸「い、いや、そういうのわからないんだって」

紗奈「追いかけてきたくせに？」

木戸「来たくて来たわけじゃ・・・」

紗奈「え？」

木戸「いえ、別に・・・」

無言が続く2人。

紗奈「あんたは親友とかいないの」

木戸「いるように見える？」

紗奈「全く」

木戸「……」

紗奈「チカはね、すごくかつこいいの。誰にも物怖じしないで、どんなときでも笑ってて。」

地味で根暗だった私の初めての友達」

木戸「地味で根暗……？」

紗奈「想像できないでしょ？ あの頃は勉強ばかりで、友達なんていなくても、

いい成績取って親が喜んでくれたらそれでいいと思ってた。周りのやつらなんて

バカばかりだつて。でもチカと友達になってから、私の世界は一変したの」

紗奈、千加子との思い出が次々と脳裏に浮かぶ。

紗奈「かつこいいチカにずっとあこがれてた。チカが私を変えてくれたの。それなのに……」

木戸「……今のチカさんはかつこよくない？」

紗奈「超ダサイよ。私と家族のこと、自分のせいみたいになうじうじ考えて」

再び2人の間に無言が続く。

木戸「……あのさ、俺は親友どころか、友達も1人もいないから、気の利いたことなんて

何も言えないけど……チカさんがビビっちゃうくらい、紗奈さんがかつこよく

なつちやえばいいんじゃないかな」

紗奈「私が、かつこよく……」

木戸「ほら、さつきも言ってた……志望校にも合格するしあんたとだつて、つてやつ」

紗奈「それが受け取ってもらえなかったから怒ってるの、私は！」

木戸「わかつてる、わかつてるよ！ だからその、俺が言いたいののは、チカさんがいなくても堂々としてる姿を見せたらいいんじゃないかっていう……」

紗奈「あんたもチカのほうが正しいって思ってるの？ チカと仲良くするのはこれつきりにして、あとはチカと離れてもやっていける姿を見せて安心させるって？ それで私とチカはそのまま別の道に進むのが幸せだって？」

木戸「……俺には、ずっと一緒にいなくても、2人は大丈夫に見えるよ」

紗奈「……そんなの、わかんないじゃない……」

木戸「ずっと一緒にいるか、ずっと離れているかだけが選択肢じゃないと思う」

木戸、恥ずかしくなつてうつむく。

木戸「あ、友達いない俺が言っても説得力はないだろうけど……」

紗奈「……あんた、なんで友達いないの」

紗奈、じつと木戸を見ている。

木戸「……人と話すと、のどが詰まったみたいに声が出なくて……不思議だよな、初対面の紗奈さんみたいな人とはまだ普通に話せるのに、自分と近い距離にいる学校の人たちには満足に相槌も打てないんだ」

紗奈「ふうん」

紗奈、席に向かって歩き出す。

木戸「あ……」

紗奈「次会ったとき、普通に話せなくなったら許さないからね」

木戸「えっ」

紗奈「戻るよ。チカと旅行はしばらくできなくなるから、無駄なこととしていられない」
木戸「いや、俺君のこと追いかけるように言われたんだけど……」

紗奈「説得遅すぎ」

木戸「ええ……」

木戸と紗奈、席に向かって歩き出す。

数分後、食べ終わる4人

千加子「やっぱ旅行といえば写真っしょ！」

紗奈「てことで、佐々木さんも木戸もこっちきて！」

木戸「君らさっきまであんなに……」

千加子が通行人にカメラを頼む。

4人で写真を撮る。

佐々木「うれしいわ、あとで送ってくれる？」

千加子「もちろん！ 瞳ちゃんラインとかやってる？」

佐々木「ええ。インスタも」

千加子「えっ！」

紗奈「佐々木さんインスタやってるの！？ 私とも交換してください！」

佐々木「ええ、よろこんで」

木戸「……………」

紗奈「…ほら、携帯貸して」

木戸「え、なんで」

紗奈「どうせアカウント持ってないんでしょ。作りかた教えてあげる」

木戸「い、いや、俺は別に…」

紗奈「……………」

木戸「…ありがとう…」

紗奈「ふん」

千加子と佐々木、顔を見合わせ笑う。

回想 千加子と佐々木、フードコートで

佐々木「木戸くん、うまくやってるかしら」

千加子「佐々木さん言ってたじゃん、木戸くんなら大丈夫って」

千加子「それにね、あんなだけけどシヤナって実は、最後に仲良くなるのは

第一印象が悪かった人ばつかなんだ」

佐々木「あら」

回想から戻る

紗奈「アカウントどころかアプリもないじゃん！　今までどうやって生きてきたわけ？」

木戸「そ、そつちこそSNSがないと生きていけないのかよ！」

佐々木、2人のやり取りを見ている。

紗奈「はい、これがあんたのアカウント。これ私だから。フォローしといて」

千加子「私のこれね！」

佐々木「私のもお願い」

木戸、インスタの画面をじっと見る。

〈フォロー3〉の文字。

木戸「……………」

千加子「てか瞳ちゃん、めっちゃインスタおしやれ！　超映え！」

佐々木「うふふ、ありがとう。」

紗奈「鳥取って本当に自然豊かなんですね……家のすぐ隣に海がある」

木戸「すごい……」

千加子「もうすぐ解散かあ、アタシたち」

紗奈「早かったよね」

木戸「……………」

佐々木「バスに戻ったら、あと2時間で松江よ。あと少し、楽しませよう」

4人、バスに戻る。
バスがPAを出る。

AM10:15 バス

千加子と紗奈、爆睡中。

木戸「乗って5分で寝ましたよ、この人たち」

佐々木「朝早くからよく動いたから、疲れちゃったのね・・・幸せそうな寝顔だわ」

木戸、窓の外を眺める。

木戸「・・・俺、島根に着くまでに、逃げ切っちゃったかも」

佐々木「逃避行だったの？」

木戸「佐々木さん、言いましたよね。『逃げればいい』って。俺、とにかく現実から

逃げたくて、このバスに乗りました。どこに行ったら変われないってわかってたけど、

自分の部屋にいたら、そのまま何かが死んでしまいそうで」

佐々木「それで、島根に？」

木戸「島根のとある島に、古民家があるんです。海に見える家。俺みたいな旅行者や

外国人にホテルとして貸し出して、古民家を運営している家族と一緒に暮らすんです」

木戸の携帯画面に、古民家のホームページ。

木戸「見知らぬ人の方が多少話せるっていうのもそうですし、ここでいつもみたい
誰ともまともに話せなかったら、もうあきらめようと思つて。自分はこういうふう
しか生きられないんだって、踏ん切りがつくと思つて」

佐々木「でも、そうはならなかった」

木戸、小さく笑う。

木戸「なんでだろう、本当に……後ろの2人は俺のことずっと下に見てるし、敬語も

一瞬で使わなくなつたし、呼び捨てだし、怖いし、佐々木さんだつて年上すぎてどう
絡んだらいいのかわからないし、それなのに3人ともぐいぐいくるし。俺に気遣いとか
全くしてくれないのに、なんでだろう、逃げ切っちゃったんですよね」

佐々木「まだまだ追いかけてきそうよ。2人も、私もね」

佐々木、木戸に笑いかける。

木戸も笑う。

木戸「……そうしてくれるなら、ありがたいですよ。バスは、逃走経路にはいいけど、

避難場所にするには最適じゃない」

佐々木「避難場所にしてはまずいぶん遠くまで来たけれど、でも、せつかく逃げてきた

んだから、楽しい思い出にしなきゃね。逃げ場が退屈だったら、逃げた意味がないも

の」

千加子「アタシらだつて、逃げてきたようなもんだし」

木戸「！……起きてたのかよ」

紗奈「珍しくぺらぺらしやべつてたから、起きちやつた」

木戸「う……悪いか」

紗奈「避難場所、島根から出たつてあるから」

千加子「そうそう、アタシも木戸もシヤナも瞳ちゃんも、みーんなアタシらの避難場所！」

佐々木「いいこと言うわね。そうね、人生つて、逃げ場があるかないかで大違い。」

「こんな良縁に恵まれるなんて、私は幸福だわ」

千加子「アタシも幸福！」

紗奈「私も」

3人が木戸を見る。

紗奈「！」

千加子「んく？」

佐々木「うふふ」

木戸「……俺も」

千加子「木戸が泣いてるー！」

木戸「うつ、うるさい！」

佐々木「(笑う)」

木戸(N)「現実からの逃げ場を探すための旅は、目的地に着く前に終わってしまった。

初めて見つけた息がしやすい場所は、3人の人間だった。このバスを降りれば、俺たちのつながりは目に見えない電波だけ。それでもなんとなく、今までのどのつながりよりも、安心できる気がした」

AM 12:20 松江駅

千加子「じゃあね、2人とも！ 楽しかった！」

紗奈「またいつか」

木戸「うん」

佐々木「楽しんでね、2人とも」

千加子と紗奈が歩いていく。

少し歩いたところで、千加子が振り返る。

千加子「あ、木戸！」

木戸「え、なに」

千加子「アンタさ、アタシらのインスタちゃんに見ろよ！ 特に瞳ちゃんのは！」

千加子、再び歩き出す。

木戸「インスタ・・・？ 急になんの話だ？」

木戸、ひとつずつアカウントを確認する。

紗奈の投稿。

千加子の投稿。

佐々木の投稿。

木戸「ん・・・？」

佐々木の投稿のひとつが、木戸が予約した古民家の写真。

『娘一家が経営している海の見える古民家、ぜひ遊びに来てください！』の文字。

佐々木「さあ、まだ道のりは長いわよ、木戸くん」